

すごろくは神の手に

東京都杉並区 菅原 あきら

私はこの春、大学を卒業する。勤務地は、まだわからない。大学生生活のうち二年間は新型コロナウイルスの蔓延により活動を制限された。授業はリモートで行われ、基本家から出ることはできない。私は、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いては、一人で関東の東京からちよつと離れた場所へ向かうようになった。

私は地理学を専攻しており、国内地理には少し自信がある。千葉県市原市。東京湾にも面していて、人口もそこそこいる。五井という地が市の栄えている場所で、五井の駅は内房線と小湊鉄道線の発着駅である。観光地というなら、チバニアンの名前の由来となった地層と市原ぞうの国を擁している。私の市原市に対する知識はこれくらいだ。千葉県内に住む友人を除けば、知り合いの中ではちよつと知っている方に部類されるのではないかと自負している。しかし、実際に現地に行ってみないとわからないことなんて山ほどある。インターネットに転がっている情報を調べればもっと詳しくなれるだろうが、目で見る、耳で聞く、肌で感じることが大事なことは地理学を学ぶなかで耳が痛くなるほど聞かされた。

私は市原市へ向かうことにした。せつかくなら特急を使いたいと思ったが、東京と君津を繋ぐ「特急さざなみ」は、平日ダイヤ

は通勤に特化したものであったため、各駅停車で向かうことにした。

電車を乗り継ぎ、一時間半程で五井駅へ着いた。何か観光地に行こうとしたが、市原ぞうの国は休業日であり、チバニアンが見られる地磁気逆転地層へ行くには長靴が必要らしかった。行き当たりばつたりの旅も有名どころへ行けなくとも面白いのではないか。そう思い立ち、サイコロの出た目分小湊鉄道を養老溪谷駅へ向かって進むことにした。

スマートフォンアプリを使い、サイコロを転がす。出た目は、三。フリーパスを購入し、早速気動車に乗り込み、上総三又駅みつまたへ向かう。車内にはお年を召した方が多く乗っていた。発車時刻ギリギリになって女子大生とみられる集団が乗り込み、車内の平均年齢が下がった。

ふと、小湊鐵道について思い出したことがあった。小湊鐵道は過去に公式ツイッターのアカウントを運営していた人が担当を外され、当時の担当者の反抗により、プチ炎上を起こしていた。たしか、ハッシュタグまで作られ大騒ぎになっていった。いつの間にか炎上は収まっていたし、乗客を見るにその騒動について知って利用している人はほほいしないだろう。尤も、あの程度の炎上で乗客数が減るなんてこともないだろうが。

気動車は一つ、二つとすごろくのマスを進める。誰も降りることなく上総三又駅へ到着した。私の他にも二組降りる人がいた。駅舎は木造であったが、古臭さは感じない。駅前には駐輪場があ

り、風も強かったため横倒しになっている。そして、謎のオブジェもあった。ロケットのような形状をしていて、頂点には穴が開いている。裏には登ってくださいと言わんばかりの梯子がついている。誰かに唆そそのかされたように梯子を登り、穴を覗く。電線の向こうに何も植えられていない田圃、道路沿いに家が建つ集落が見える。ホームから見える景色に電線が追加されただけである。わざわざ登らせるようにした意味は何か、考えてもしよがなかつた。頭にはてなを残しながら、上総三又駅の周りを散策することにした。駅舎から右へ出て、道路を左へ向かう。ちよつと歩くと国道へ出た。向かいに見えるコインランドリーは、外壁から見ると元々コンビニだつたのだろうと、コンビニだつたと確定した訳でもないのに当時のことを考えてしまう。ここにコンビニがあつたら駅利用者も便利だろう。国道を左へ進む。ヘアサロンや学生服屋を過ぎると、コンビニがあつた。ここにコンビニがあるのなら、あそこにコンビニがあるのは不自然か。そう思っていると、尿意が迫る。コンビニへ向かい、用を足した。東京のコンビニではトイレを使用するときには店員に声をかけなければいけなかつたり、使用すること自体禁止されているトイレもあるのに、ここは自由に使つていいそうだつた。上京する前、地元でもそうだつたなと懐かしい気持ちになつた。トイレを貸してもらつたお返しにと、何か買うものを物色する。昔、トイレ借りたからつてわざわざ商品買うのは仕事が増えるだけだからやめてほしいという旨の文言を見た気がする。しかしもう慣例となつてしまつていて、買わずにはいられなくなつていた。ホットスナックのカレーパンを購入

し、コンビニのすぐ外で食べた。

コンビニを出て、横断歩道を渡り右へ向かう。ガレージのようなものが目に留まる。しかしそれはガレージではなく、祠ほこを守る屋根であつた。その祠へ向かうと、反対側には鳥居があり、神社であることが分かつた。今日の旅がいい旅となりますようにと願掛けをし、神社を去つた。神社の鳥居をくぐり、左に出ると大きな建物があつた。支所だ。支所の周りにはコミュニティセンターや発達支援センターなるものもあつた。ここが恐らくこのあたりの中心地となるのだろう。この近辺の人々は近くのコンビニでご飯を買つてここに集まるのだろうか。なんとなく想像がついた。発達支援センターを左に曲がると、あぜ道の中にある踏切に目が留まつた。そのまま足を吸い寄せられるかのように踏切を渡つた。あぜ道なので地面はコンクリートではないし、踏切には遮断機もない。質素な踏切に可愛さを覚えた。踏切から左を覗くと近くに駅のホームが見えた。結構近くをうろちよろしていたことに気付く。では、線路の反対側を巡つて駅へ戻ろう。そう思い、ロケットから見えた集落に向かつた。

この集落はまさに「路村」だつた。一本の道路沿いに一軒家が多く建つている。それぞれが和風な佇まいをしている中、一つだけ洋風な建物が立つていた。看板には「英会話教室」の文字。住んでいるのは外国人だろうか。どのような人が習いに来ているのだろうか。想像は膨らむばかりだ。道を歩いていくと、集落が終つた。そこには三つの石碑が建つていた。どうやらこの地域は土地改良区に指定されており、その竣工を記念して建てられた石

碑のようだった。周りを見渡してもやっている工事は発達支援センターの建物のみで、土地改良とやらをやっている様子はない。もうこの事業は終了したのだろうか。

上総三又駅へ戻ってきた。親子連れと共に気動車を待つ。サイコロを振る。出た目は四。上総牛久駅だ。気動車に貼ってあった沿線案内図では有人駅と記されていたので、拓けた街があることは想像に容易い。どのような街だろうか、聞き馴染みのない街へ期待を膨らませる。気動車に乗る。一駅一駅と進む気動車。途中にもう一つ有人駅があった。光風台駅だ。○○台や○○丘という地名の場所は、デイベロッパが作り上げたどこにもあるような住宅街というイメージが強い。先ほど訪れた上総三又駅の周辺は田圃が多く、これから山へ向かっていくのに、そのような場所があるのだろうかと思った。しかし、車窓からは斜面に所狭しに家が建っている光景が見えた。何なら大きめのマンションまである。駅からは少し離れているようにみえるが、あそこが光風台なのだろうと思った。自分の想像する○○台は、市街地縁辺にあるイメージであったが、車窓に映る光風台は田園風景のなかに突如現れたお城のように見えた。光風台へ訪れてみたいと思ったが、サイコロは上総牛久駅へ行けと言っている。光風台を見送り、上総牛久駅へ向かった。

気動車は上総牛久駅へ到着した。終着駅であったようで、乗客全員が降り、線路内を通過して駅舎へ向かう。駅舎は立派で、待合室も広ければテレビまで付いている。新幹線駅の待合室を思い

起こした。駅にはカフェが併設してあったが、昼休みのようで閉店していた。とても残念だったがこれも行き当たりばったり故のこと、仕方がない。

駅舎をでると「思いやりのまち 牛久」南市原まちづくりナウ」と書かれたアーチがお出迎えしてくれた。このアーチができたのは相当前だろうが、「ナウ」を最後に付けるのはとても若々しい印象だった。右を向くと、大きな階段と赤い小屋があった。案内板によると、「里山トイレ」というらしい。これがトイレ。洒落ている。赤い小屋ではトイレに人が入っているかどうかを確認できる。おしゃれ且つ利便性も高いようだ。トイレは四種類あり、それぞれにコンセプトがある。色々なトイレに入ってみたいところだが、男性用トイレは階段のトイレのみだった。無念だが、女性もまた階段のトイレに入れない。どちらの性であろうと残念に思うことに変わりはないのだ。

階段のトイレで手を洗い、アーチをくぐる。飲食店や信用金庫などを抜け、突き当りを右に進む。商店街のようで、豆腐屋や時計屋などいかに商店街というようなお店が連なる。お店によっては人の写真とともに文が書かれている大きな暖簾が掲げられている。大学とのコラボレーション企画らしい。商店街も色々考えて再起を図っているのだなと感じた。駅に併設されていたカフェや、里山トイレも同じ類なのかもしれない。

商店街を進むと大きな鳥居が目に入った。上総三又駅でも神社へお参りはしたが、ここでもしよう。念には念だ。鳥居のそばには、三嶋神社と書かれた幟がはためいている。鳥居に向かいお辞

儀をし、中に入る。お供え物にはコカコーラが置かれていた。お供え物も地域によつて異なるのだろうと、他の神社のお供え物も思い出しながら感じた。二礼二拍手一札を済ませると、違う鳥居から境内を後にした。時間も昼丁度、腹ごしらえをしようとする向かう。駅へ向かう道にはコインランドリーや百円ショップはあれど、食事処は見当たらずそのまま駅へ着いてしまった。アーチをくぐつてすぐの飲食店は民家の出で立ちで入るにはハードルが高く感じた。線路の向こうには、車窓からマクドナルドやガストがあることは知っていたが、チェーン店で食事を済ませることに抵抗があった。一旦線路の向こうに行つてみようかと、踏切を渡り国道へ出た。お食事処と大きく書かれた看板が見えた。看板には刺身、天ぷらと書いてあるし、ご当地グルメも堪能できるのではないかと思ひ、看板に促され角を曲がる。そのようなお店はなく、隣の病院に通院しに來たであろう老人に怪訝そうな視線を向けられる。これは残念だと思ひつつ国道へ戻り歩く。これは駅前にあつた飲食店に行くしかない。そう思ひ立ち駅へ向かつた。そして、おばあちゃんの写真と年越し蕎麦について書かれている暖簾のある蕎麦屋へ入る。店内には三組ほど先客がおり、蕎麦を食べている。おばあちゃんが出迎えてくれた。奥から「いいよ、座つてな」という男性の声が聞こえる。おばあちゃんの息子だろうか。どうやら二人でお店を切り盛りしているらしかつた。男性に温かいお茶を出されると、きつねそばを頼んだ。そばのつゆはあまりしょっぱい味付けで、出汁が効いている。しゃきしゃきのネギの歯触りも良い。あまりに美味しく、すぐに食べ終えてしまった。

会計を済ませお店を出ようとすると、出入り口にパンフレットがあつた。うしぶら、というプロジェクトのパンフレットのようなやつだ。牛久商店街を盛り上げるためのプロジェクトで、先ほどの大宇とコラボした暖簾や駅にあつたカフェのことも載つていた。次のダイヤも迫つてのことだし、電車の中でじっくり読もうと一つカバンに入れた。

上総牛久駅へ戻り、サイコロを振る。出た目は一。上総川間駅だ。普段のすぐろくなら嫌な一だが、数字が小さい目が出るほどたくさんの場所へ訪れることができるのでそれもまた良いのである。

駅舎に備え付けられているテレビを見る。ワイドショーでは専門家からタレントまで同じようなコメントを發している。専門家と言えど今取り扱つているニュースの専門ではないのだろう。不意に駅のホームへ目を向けると、気動車が動き出していた。一本逃してしまつたのだ。しかし一駅ともなれば、歩いて行ける。幸い上総牛久駅から上総川間駅までの距離はさほど遠くなく、歩いて行けば次のダイヤまでの時間を余らせる程であつた。しかも、もうすぐ開店する駅併設のカフェへも訪れることができる。これはむしろラッキーなのかもしれない。ありがとう神様と心の中で呟き、駅の待合室でカフェの開店を待った。

カフェが開いた。すぐに行くのは何か恥ずかしく、数分待つてからカフェを訪れた。ほぼテイクアウト専門のようなお店で、その場でドリンクを飲む場合は外にあるベンチに腰掛けて飲むスタ

イルだった。ホットコーヒーを頼む。コーヒーが出来上がるのを待つ間、何か手持無沙汰に感じたので、「ここ新しくできたんですか？」と店主に尋ねる。「二年前くらいにできました」と店主。ここにはサイコロで来ました。テレビの企画みたいですね。他愛もない会話を繰り返して、コーヒーが出来上がる。カップには店名の書いてあるシールが貼られている。コーヒーを受け取り、カフェを出る。そのままアーチをくぐり、突き当りを左へ進む。徒歩で上総川間駅へと向かう。

大きな道を道なりに進む。途中、大きな書店を見かけ、引き寄せられるように入る。大きな駐車場に大きな本屋。都市部ではまず見られない光景だ。本屋に入ると入り口すぐにくじ引きが大量に入ったクレイニングゲームが目に入る。百円を入れ、一回やってみる。カプセルの中には当たり確定のくじが入っているそうだったので、カプセルめがけてアームを下す。見事カプセルを掴み、落とす。落とした先にも板があり、前後に動く機械によって押し出されて初めて手元にくじやカプセルがくる仕組みだった。惜しくもカプセルまでは手元に来なかったが、十五個のくじが手に入った。これは大量だ、小さな賞でもなにか当たっているだろう。そう思い一つ目を開ける。はずれ。二つ目を開ける。はずれ。その後もはずれは続き、十五個のくじはすべてはずれであった。旅に関与しない運事は、旅の神も関与せずといったところだろうか。すべてのはずれくじをくず箱へ入れ、店を出る。中身空っぽのパチンコ屋やソーラーパネルの敷き詰められた場所を尻目にどんどん進む。左手に山、右手に農地という光景が続いた後、左の山が

消え道が出てきたので左へ曲がる。角のゴミ置き場に「川間」という地名が書かれていたので間違いないだろう。遠くからトロツコ列車が走ってくる。老夫婦がこちらに手を振ってきたので振り返す。すると、違う車両のおじいさんもこちらに手を振ってきた。地元住民ではないが、少し誇らしい気持ちになった。普段からの沿線の人々はこうやってトロツコ列車の乗客に手を振っているのだろうか。

踏切を渡り、上総川間駅へ着く。突然、壁が現れた。しかも、スーツケースが敷き詰められた壁だ。説明書きもなにもなく、ただただ駅前に鎮座している。それぞれの思い出を運んだスーツケースは、今や壁になっている。これが現代芸術というものなのだろうか、未熟な私にはまだわからない。

歩き疲れた。少し待合室でダイヤを確認しつつ休憩しよう。椅子に腰かけていると、制服を着た子供から「こんにちは」と声をかけられる。私も「こんにちは」と返す。小さい頃は、道ですれ違った人全員に挨拶していたな、いつからしなくなったのだろうか。とふと回顧する。制服を着た子供はそのままホームへ向かい、列車を待つ。

気動車もそろそろやってくる、サイコロを振ろう。出た目は六だった。目的地は月崎駅だ。多くの駅をすつとばしてしまいう残念な気持ちと、ただ単に大きな目が出たという喜びが混じった。

気動車がやってきた。さつき挨拶をした中学生はそのまま気動車を待ち、見えないところからホームに入ってきたのだろうか中学

生が数人気動車に乗り込んだ。車内は大学生とみられる集団が多く乗っており、最初に乗った気動車の車内の雰囲気とは違っていた。大学生の集団は高滝駅で降りて行った。近くにはダムなどもあるらしいので、自然を楽しむに来たのだろうと思った。

気動車は月崎駅へと着いた。下車すると、缶に切り込みを入れ程よく潰したものがカラカラと音を立てて出迎えてくれた。地域住民の手作りだろう。駅を降りると目の前にはヤマザキシヨップが一軒、そして観光マップの看板が何個もあった。月崎駅はチバニアンのある地層の最寄り駅らしかった。ヤマザキシヨップではレンタサイクルの貸し出しもやっており、気軽にに行けるようにとの工夫がなされていた。こればかりは長靴や汚れてもいい服装を持って来ればと後悔した。地理学を専攻する身としてはチバニアンを見ておきたかった。

後悔は月崎駅前に置いて、レンタサイクル置き場を右に曲がる。観光マップにあった手彫りのトンネルへ向かう。踏切を渡り真っすぐ進むと、左手に薄暗いトンネルがあった。トンネルは将棋の駒のような形で口を開けていた。トンネルの中は未舗装で、ところどころから水が滴る音がした。説明板によると、明治にできたトンネルで、観音掘りという掘り方で作られているそうだ。百年以上も前の人たちの努力の空洞をくぐり、林道へ出る。少し進むと「里山のパワースポット 浦白川のドンドン」と書かれた紙が木に貼り付けられていた。張り紙の先には、獣道とも言えるような道があった。駅前の観光マップにも記されていない場所など気にならない訳がない。獣道を進んでいくと階段のようなものが

あった。進んでいる道は正しいみたいだ。湿地の中、踏み固められ道となった地面を進む。五分もしないうちに行き止まりにあたってしまった。間違えていたのか。そう思っていると、行き止まりの先から人の声が聞こえる。道の一段下にある木々のトンネルから男と犬が出てきた。この段差を下れば、浦白川のドンドンへ行けるかもしれない。そう思い、近くの雑草を掴みながら段差を下りる。犬に吠えられる。私は犬を無視し、木々のトンネルに進んだ。先ほどの男と犬と一緒に行動しているであろう女が木々のトンネルの前で電話をしている。道を譲ってくれた。ありがとうとジェスチャーで示し、木々のトンネルとくぐる。そこには川が流れていた。この川が浦白川か、ではドンドンとは何だ。左手には大きな洞窟があった。これがドンドンなのだろうか。洞窟の中から川は流れてきているため、この洞窟もまたトンネルなのだろうか。川面に出ている石をなんとか渡り、洞窟の前まで来てみる。奥から光が差し込んでいるのが見える。かなりの高さがあり、間近でみる洞窟は圧巻だった。夏には水着で洞窟の中を探検してみたいものだ。

時間を見ると、次のダイヤが迫っていた。浦白川のドンドンに長く居すぎたようだ。月崎駅へ向かう途中でサイコロを振る。もうゴールの養老溪谷駅まで二駅までのところへ来ていたので、一以外が出ればゴールだ。出た目は四。ゴールだ。楽しかったすくろく旅もこれで終わりだ。月崎駅へ行き、先ほど浦白川のドンドンに向かう道中で会った犬とまた遭遇する。吠えられることはな

かった。気動車へ乗り込むと、乗客は誰もおらず貸し切り状態だった。谷の間を気動車は走る。途中道と並走しつつ、道が上へ登っていき、また谷の間を走る。やはり、来てみて初めて知ることは沢山あった。町おこしの様子、昔の人々の暮らし、アート作品。百聞は一見にしかずとはこのことだ。道中に参拝した神様は、願いを叶えてくれたと思う。まだ行けていない場所へ行くために、また市原市へ訪れよう。気動車は、養老溪谷駅へ到着した。